

第11回NPT再検討会議第2回準備委員会への出席等について（帰国報告）

1 概要

スイス・ジュネーブ市で開催された第11回NPT再検討会議第2回準備委員会に出席し、国連・各国政府関係者等に対して、スピーチや個別の面会を通じて、核兵器のない平和な世界を願うヒロシマの心を伝え、具体的な核軍縮の進展を要請した。また、広島県内で平和活動に取り組む高校生を「平和首長会議ユース」として派遣し、平和首長会議主催ユースフォーラムの開催等を通じて、次代の平和活動を担う青少年の育成を図った。

2 出張者

平和首長会議会長（広島市長） 松井 一實ほか5名

3 出張期間（市長及び随行者2名）

令和6年7月20日（土）～7月27日（土） 5泊8日

※ 他の3名及び高校生一行（高校生8名及び随行者職員2名）は別日程

4 主な用務

(1) 第11回NPT再検討会議第2回準備委員会NGOセッションでのスピーチ（7月23日）

松井会長は、鈴木副会長（長崎市長）と共に平和首長会議の代表として行ったスピーチで、広島・長崎の被爆体験は核兵器廃絶の根拠となるべきものであり、我々は、核兵器は「断じて使ってはいけない兵器」であると訴え続けてきたにも関わらず、現下の国際情勢では、核兵器が「条件次第で使える兵器」へと評価が変わっていることを極めて遺憾であるとした上で、広島平和記念資料館の訪問者数が過去最多となっていることに触れ、為政者に対し、平和を愛する市民社会の声を踏まえ、核戦力強化や軍拡競争を肯定的に捉えることを直ちに直視し、対話による外交努力をもって、核軍縮・不拡散措置を確実に進展させるよう訴えた。



松井会長によるスピーチ

(2) 各国政府代表等との面会

ア 核保有国代表

松井会長は、核保有国であるフランス及び米国の代表者に対し、核保有国である両国にも加盟都市があり、世界中で核兵器廃絶を求め、平和を愛する市民社会が広がっていることを紹介し、市民社会の声を軽視せず、対話による外交努力を行い、誠実に核軍縮交渉を行ってほしいと要請するとともに、平和首長会議の取組への協力を依頼した。また、各国が考える核軍縮に向けたアプローチ等について、意見交換を行った。



プティ軍縮会議フランス政府常駐代表（右）
（7月22日）



シャインマン米国大統領特別代表（中央）
（7月24日）

イ 日本政府代表（７月２５日）

市川軍縮会議日本政府常駐代表は、現在の国際安全保障が非常に厳しい情勢にあることを強調し、今後は、少しでも軍縮を進展させることに注力していかなければならないとの見解を示されるとともに、面会に同席したユースに対し、被爆の実相に関する映像や資料を自分の目で見て心で感じ、それを自分の言葉でアウトプットし、今後の活動の中で、多くの人に伝えていってほしいと激励された。



市川大使（左）

その他、タイ、メキシコ、アイルランドの政府代表とも面会し、意見交換を行った。

ウ 国連関係者等

（ア）中満国連事務次長兼軍縮担当上級代表への署名の手交及び面会（７月２３日）

松井会長が平和首長会議ユースの活動について紹介した後、ユース代表から中満国連事務次長に、「この署名は、市民の平和を願う心を集めたものです。」と約４万４千筆分の『核兵器禁止条約』の早期締結を求める署名の目録を手交した。中満国連事務次長は、次代を担うユースに対し、意見が異なる人との対話こそが大切であり、世界で起きていることに関心を持ち、様々な考えを聞き、対話を重ねることで、平和を構築する輪を広げてほしいと激励された。



中満国連事務次長（後列中央）
と高校生

（イ）ヴァロヴァヤ国連欧州本部事務局長との面会（７月２３日）

松井会長は、国連欧州本部内の常設原爆展の展示延長決定に対し、謝意を伝えるとともに、軍縮政策等を効果的に進めるために本展示を有効活用してほしいと期待を伝えた。これを受け、ヴァロヴァヤ事務局長は、原爆常設展は重要な展示であり、延長は自然な事であるとの見解を示されるとともに、現在の厳しい国際情勢の中では、核戦争、核兵器について特に若い世代に伝えていくことが大事であると考えており、今後も両市と連携していきたいと応じた。



ヴァロヴァヤ事務局長（中央）

（ウ）ラクメトゥリン第１１回ＮＰＴ再検討会議第２回準備委員会議長との面会（７月２４日）

松井会長は、議長の出身国であるカザフスタンの長年にわたる核兵器廃絶に向けた尽力に敬意を表するとともに、広島市と同国セメイ市のこれまでの交流に触れ、同国内における加盟拡大への協力等、今後の更なる連携強化についての期待を述べた。これを受け、ラクメトゥリン議長は、国レベルで核軍縮に取り組むことも重要だが、市民社会からのインプットも非常に重要となるので、これからも平和首長会議の活動に協力していきたいと応じた。



ラクメトゥリン議長（中央）

(イ) セス国連訓練調査研究所（ユニタール）総代表との面会（7月22日）

セス総代表は、平和首長会議の加盟都市数の増加に触れ、今後の更なる活動強化への期待を述べるとともに、被爆80周年を迎える来年に向け、核軍縮を強く進めていく必要があるとの見解を示された。松井会長は、平和首長会議として、被爆の実相を世界に伝え続け、為政者が市民社会の声を無視することができないような環境づくりを進めるため、教育を専門とするユニタールと連携した取組を進めていきたいと協力を依頼した。



セス総代表（左から3人目）

(オ) キンボール全米軍備管理協会事務局長との面会（7月25日）

キンボール事務局長は、世界では戦争のリスクが高まっており、軍縮は困難な状況に直面しているが、広島・長崎で起こったことを繰り返してはならないとの見解を述べた。松井会長は、平和首長会議の米国における活動状況を紹介するとともに、被爆80周年を迎える来年の取組に関する意見交換を行い、今後も緊密に連携していくことを確認した。



キンボール事務局長（前列左）

(3) 主催行事等

ア 平和首長会議ユースフォーラムの開催（7月23日）

同準備委員会のサイドイベントとして開催した本フォーラムでは、平和首長会議ユースや世界各地で平和活動に取り組む若者8組が、取組発表を行うとともに、平和活動を行う上での課題等についてディスカッションを行った。参加したユースからは、様々な立場で多様な活動を行う同世代の仲間を知る良い機会になった、従来の枠組みに捉われることなく、様々な視点から核兵器廃絶を働きかける重要性を改めて認識したとの感想があった。フォーラムの最後には、中満国連事務次長から、これからの未来はユースの未来であり、未来を良くするための意思決定にユースが常に参加すべきであると述べ、ここにいる皆さんが引き続き平和活動に携わり、活動を発展させていってほしいと激励の言葉をいただいた。



フォーラムの様子

イ 平和首長会議役員都市意見交換会の開催（7月24日）

広島市、長崎市、フランス・マラコフ市、フィリピン・モンテンルパ市、スペイン・グラノラズ市、クロアチア・ビオグラード・ナ・モル市、フランス支部の6都市・1支部が出席し、各都市等における取組発表や今後の活動に関する意見交換を行った。松井会長は、出席した役員都市等に対し、厳しい国際情勢の中ではあるが、各地域での活動を強化し、市民社会における平和意識の醸成と核兵器廃絶に向けた為政者の政策転換を後押しする環境づくりに取り組んでいこうと呼び掛けた。



意見交換会の様子

ウ 平和首長会議原爆平和展（7月22日～7月29日）

同準備委員会場内において、会議出席者や国連関係者等に被爆の実相や核兵器の非人道性、平和文化の振興に向けた平和首長会議の取組に理解を深めてもらうため、平和首長会議原爆平和展及び子どもたちによる“平和なまち”絵画展を開催した。7月22日には、高村外務大臣政務官が展示を視察し、松井会長及び鈴木副会長から展示内容の説明を行った。



原爆平和展の様子



子どもたちによる“平和なまち”
絵画展の様子

(3) その他の出席行事

ア ユース交流レセプション（7月22日）

市川軍縮会議日本政府代表部特命全権大使公邸で開催されたレセプションでは、中満国連事務次長、高村外務大臣政務官等の出席の下、平和首長会議ユースのほか、翌日の平和首長会議主催ユースフォーラムで発表を行うナガサキ・ユースやジュネーブ市の学生が招待された。平和首長会議ユースは、被爆体験記を聞くことが出来るQRコードが入ったカードの配布や各学校での活動、日本文化の紹介等を通じて、参加した他の若者たちと交流を深めた。



レセプションの様子

イ ドキュメンタリー映画「Paper Lanterns」上映会（7月23日）

同準備委員会のサイドイベントとして、国連軍縮研究所と軍縮会議日本政府代表部の共催で開催された同上映会（広島への原爆投下で犠牲となった12名の米兵捕虜の身元を、40年以上にわたり捜索してきた森重昭氏の活動を追ったドキュメンタリー映画）で、松井会長が開会挨拶を行い、未来の世代が、この映画に登場する人々が経験したような悲惨な歴史を繰り返さないよう心から願っていると述べるとともに、この映画を通じて、被爆者の「このような苦しみを他の誰にも味わわせてはならない」という思いを感じ、より良い未来の道筋を描くきっかけとしてほしいと、集まった観客に呼び掛けた。



会長の開会挨拶の様子